

推薦及び一般入試の受験者層の推移に関する検討

石井秀宗（名古屋大学）

本研究では、受験者の学力レベルがどのように推移しているか、推薦入試との関連も含め検討した。その結果、(1)上位校離れは起きていないこと、(2)しかし、上位者離れは起きている可能性があること、(3)推薦入試、特にセンター試験を課さない推薦入試自体が、相対的に学力水準が低い層の受験者のための入試になっており、その層からの受験者をより大きい割合で合格させていること、(4)そのことが入学者の学力水準の低下として捉えられている可能性があること、などが示唆された。

1 問題と目的

推薦入試をめぐる議論において、「推薦入試を実施すると学部レベルが下がる」という意見が聞かれる。ここで言うレベルとは、主に学力レベルのことである。

このように言われる理由としては、推薦入試で合格した学生は一般入試を受験した学生に比べ受験勉強をした期間が短い、上位校に比べ下位校のほうが学校の指導体制が整っており、相対的に学力の低い生徒が推薦入試で合格する可能性が高い、そもそも推薦入試を受験する生徒の学力層が一般入試を受験する生徒の学力層よりも低いなど、推薦入試志願者側の要因が挙げられている。

また、関連する別の理由として、相対的に下位校の生徒が推薦入試で合格するような学部に対しては、上位校の生徒は進学意欲を減退させ、一般入試において上位層離れが起きるといふ、一般入試志願者側の要因も考えられている。

A 大学 B 学部(国立文系)では、2007 (H19) 年度入試から、定員の一部について推薦入試を実施しているが、2011 (H23) 年度に行った検討(石井, 2012)では、教養教育段階の各年度入学生の成績はほぼ横ばいで、低下していないという結果を報告していた。しかし、

そこでは、入学後の成績であるため入試不合格者及び入学辞退者のデータがないこと、入学後一定期間が経過した成績であり受験段階の成績ではないこと、成績評価が4段階と精度が粗いことなど、いくつかの問題点が残されていた。

そこで本研究では、受験者の出身学校に関する情報、一般入試受験者の大学入試センター試験の成績などのデータを加え、同学部受験者の学力レベルがどのように推移しているか、推薦入試との関連も含め検討する。

まず、次節において、同学部の推薦入試及び一般入試の概要について説明する。

次に、入試区分別、年度別に、受験者の出身高校の偏差値分布を検討する。もし、入試区分別または年度別に分布の違いが見られれば、出身高校の層に変化が生じているということになる。

受験者の出身高校の偏差値分布には違いが見られなかったとしても、志願してくる生徒個人の成績は変化しているかもしれない。つまり、上位校離れは起きていなくても、上位者離れは起きているかもしれない。そこで、一般入試受験者について、大学入試センター試験の得点を変換して年度間で比較できるようにした上で、成績分布の年度間比較を行う。

もし、年度別のセンター試験成績分布に違いが見られれば、一般入試受験者層に変化が生じているということになる。

なお、本研究では、推薦入試は 2007 (H19)～2013 (H25)年度、一般入試は 2010 (H22)～2012 (H24)年度のデータを利用する。各年度の受験者数及び定員を表 1 に示す。

表 1 から分かるように、同学部の入試倍率は、一般入試は 3 倍前後であるが、推薦入試では 2007 年度から 2012 年度にかけ 4.60 から 1.40 へと大きく減少している。

表 1 本分析に用いたデータ

年度	推薦		一般		
	定員	受験者数	定員	受験者数	
2007	15	69	50	/	
2008		50			
2009		45			
2010		42			170
2011		24			164
2012		21			146
2013	10	38	55	/	

2 入試の概要

2.1 推薦入試

A 大学 B 学部の推薦入試は、大学入試センター試験を課さない入試であり、11 月下旬に実施される。選抜は、第 1 次選考と第 2 次選考により行われる。定員は、2012 年度までは 15 名、2013 年度からは 10 名である。

第 1 次選考は書類審査で、志願書と推薦書及び調査書を審査する。志願書には、志望動機（約 600 字）と、課題に対する小論文（約 1200 字）を記述する。推薦書及び調査書には、学級担任またはこれに相当する者による推薦理由や特記事項の記述と、人物評価項目及び学業成績項目への回答からなる。これらの書類を審査し、定員の約 2 倍の人数を第 1 次合格者とする。

第 2 次選考は、第 1 次合格者に対して、小論文及び面接試験を課して行われる。小論文の試験時間は 3 時間で、日本語及び外国語（英語）で出題される設問に解答する。面接試験

では、複数教員による 20 分程度の個別面接が、各受験者に対して 2 回実施される。それぞれの面接において受験者は、志願書の課題に対して書いた小論文に基づき数分間のプレゼンテーションを行い、その後質疑応答がなされる。小論文及び面接試験の結果を総合的に判定し、合格者を決定する。

2.2 一般入試

同学部の一般入試は、大学入試センター試験と、前期日程で個別学力試験を課す入試である。

大学入試センター試験においては、「国語」「数学①(数 I・数 A)」「数学②(数 II・数 B, 工業数理基礎, 簿記・会計, 情報関連基礎から 1)」「外国語(英, 独, 仏, 中, 韓から 1)」「地理歴史(世界史 B, 日本史 B, 地理 B から 1)」「公民(現代社会, 倫理, 政経, 倫理政経(2012 年度)から 1)」「理科(物理 I, 化学 I, 生物 I, 地学 I から 1)」の 5 教科 7 科目を課している。配点は、国語 200, 数学 200, 英語 200, 地歴・公民 200, 理科 100 である。なお、2013 年度から、地歴・公民は、「世界史 B, 日本史 B, 地理 B, 倫理政経から 2」である。

個別試験においては、国語, 数学, 外国語の 3 教科 3 科目を課している。配点は、国語 600, 数学 600, 外国語 600 である。

2 段階選抜は行わず、総合成績に基づいて選抜を行っている。定員は、2012 年度までは 50 名、2013 年度からは 55 名である。

3 受験者の出身高校偏差値の分布

各受験者の出身高校の偏差値を推定し、入試区分別、年度別にその分布を比較する。

まず、高校偏差値を、「高校受験 高校偏差値情報 2013」(<http://momotaro.boy.jp/>)の値から得た。中高一貫校等で高校偏差値がなく、同じ学校の中学校偏差値がある場合は、中学校偏差値を使用した。また、通信制高校、

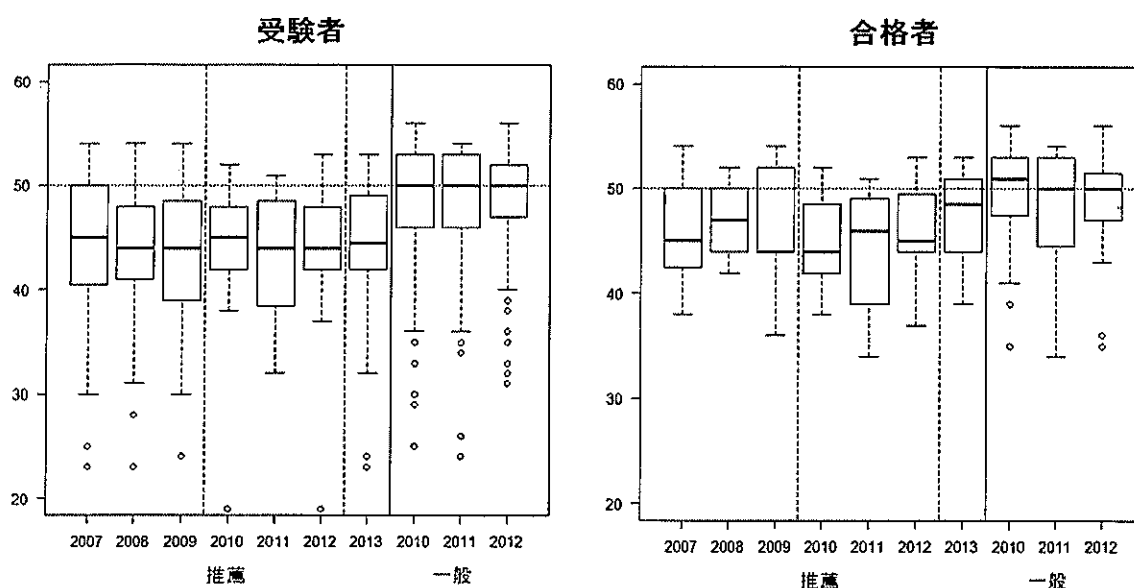


図1 入試区分別, 年度別の高校偏差値分布

単位制高校, 高卒認定試験などで高校偏差値が推定できない場合は欠測値とした。

次に, 2010年度一般入試受験者の高校偏差値分布の中央値が50になるように, 全受験者に一定数を加えた。

図1に, 入試区分別, 年度別に集計した受験者出身高校の偏差値分布を示す。図1の左図は全受験者について, 右図は合格者についてのものである。

図1を見ると, 一般入試受験者の中央値は3カ年とも50であるのに対し, 推薦入試受験者の中央値は44~45で, 分布の広がりに変動はあるものの, 分布の中心的位置はどちらもほぼ変化していないことが分かる。

合格者について見てみると, 一般入試では中央値が50以上であるのに対し, 推薦入試では, 2007~2009年度は上ヒンジ(値が中央値以上であるデータの中央値)が50以上であるものの, 2010~2012年度は上ヒンジが50未満となっている。

そこで, 入試年度を2007~2009年度, 2010~2012年度, 2013年度の3期間に分け, 各期間の高校偏差値の分布統計量を算出した。その結果を表2, 表3に示す。

表2 受験者の高校偏差値分布

区分	年度	Q1	Med	Q3	Mean	SD
推薦	2007-09	40	44	49	43.9	6.6
	2010-12	42	44	48	44.3	5.9
	2013	42	44.5	49	44.1	6.8
一般	2010-12	47	50	52	48.5	5.2

表3 合格者の高校偏差値分布

区分	年度	Q1	Med	Q3	Mean	SD
推薦	2007-09	44	46	51	46.5	4.7
	2010-12	42	44	49.3	45.1	4.8
	2013	44.8	48.5	50.5	47.0	4.9
一般	2010-12	47	50	52	49.1	4.4

表2, 3を見ると, 3つの期間の推薦入試受験者の分布はほぼ同じ位置にあること, 推薦入試受験者の分布は一般入試受験者の分布よりも低い位置にあること, 推薦入試合格者の分布は2010~2012年度で低く, 2013年度で上昇していることが分かる。

4 一般入試受験者のセンター試験成績の分布

一般入試受験者の, 年度別の大学入試センター試験の成績分布を比較する。

センター試験の科目としては, 受験者が多かった「国語」「数Ⅰ・数学A」「数Ⅱ・数B」「英語」を用いた。

成績処理は以下のように行った。まず、当該年度の全国平均と標準偏差を用いて、全国平均の値が 50、全国平均+1 標準偏差の値が 60 になるように、各科目の得点を Z 得点化した。各年度の各科目の全国平均、標準偏差、及び満点の Z 得点は表 4 に示す通りである。

次に、2010 年度の同学部受験者の当該科目の中央値が 50 になるように、各科目において Z に一定数 C を加えた(Z')。

さらに、表 4 にあるように、同じ科目でも年度ごとに満点の Z 得点が異なることから、次のような変換をした。すなわち、最小の満点の Z 得点 U に先の一定数 C を加えた値(U)よりも大きい Z' の値を U' に置き換えた。

例えば、国語であれば、各年度の全国平均と標準偏差を用いて得点を Z に変換し、次に、2010 年度のデータから国語における一定数 C を求め、Z+C により Z' を計算し、次いで、最小の満点の Z 得点 U は 2012 年度の 73.23 であるので、73.23 + C により U' を求め、そして、2010 年度及び 2011 年度のデータにおいて U' よりも大きい Z' の値を U' に置き換えた。数 I・数 A、数 II・数 B、英語についても同様の変換を行った。

3 教科の合計得点の計算にあたっては、同学部におけるセンター試験の配点比率に従い、国語、英語のデータをそれぞれ 2 倍し、それらと 2 つの数学のデータを合計して、各受験者の 3 教科合計の成績とした。

3 カ年の間で、センター試験全受験者の学力分布が一定であれば、各年度の 3 教科合計得点の分布を比較することにより、センター試験成績の経年変化を捉えることができる。

図 2 に一般入試受験者のセンター試験 3 教科成績の分布を示す。また、表 5、表 6 に分布統計量を示す。

表 4 センター試験の全国平均と標準偏差

	2010	2011	2012
国語	107.62	111.29	117.95
	30.17	33.10	35.32
	80.62	76.80	73.23
数 I・数 A	48.96	65.95	69.97
	19.63	20.52	19.98
	76.00	66.59	65.03
数 II・数 B	57.12	52.46	51.16
	23.20	24.08	19.90
	68.48	69.74	74.54
英語	118.14	122.78	124.15
	39.96	41.24	42.05
	70.49	68.72	68.04

上:平均, 中:標準偏差, 下:満点のZ得点

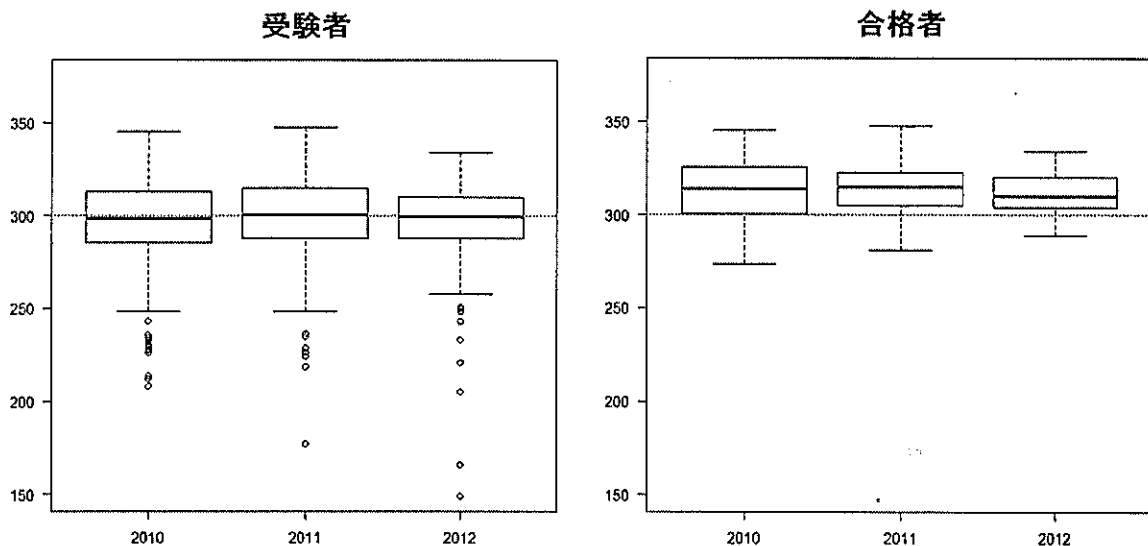


図 2 年度別のセンター試験3教科成績分布

表5 一般入試受験者のセンター試験3教科成績分布

区分	年度	Q1	Med	Q3	Mean	SD
一般	2010	285.4	298.5	312.8	293.6	32.5
	2011	288.1	300.8	314.6	297.8	26.0
	2012	287.8	299.6	310.1	295.3	26.9

表6 一般入試合格者のセンター試験3教科成績分布

区分	年度	Q1	Med	Q3	Mean	SD
一般	2010	300.6	313.8	325.1	313.3	16.1
	2011	305.0	314.9	322.5	314.6	15.0
	2012	304.1	310.0	320.2	311.0	11.9

図2を見ると、一般入試受験者において、3教科成績の中央値はほぼ300で、年度間でほとんど上下しておらず、分布の中心的な位置はほとんど変化していないことが観察される。しかし、髭の上端及び上ヒンジの位置は、2010、2011年度に比べ2012年度は低い位置にあり、2012年度において成績の高いところの値が減少していることが分かる。

表5、6を見ると、一般入試受験者の第1四分位数（分布の下から25%のところの値）がやや上昇する一方、第3四分位数（分布の下から75%のところの値）はやや低下していることが見てとれる。合格者においては、第1四分位数は3ポイント以上上昇しているが、中央値が約4～5ポイント、第3四分位数は約2～5ポイント低下しており、成績の高いところの値が減少していることが確認される。

5 考察

5.1 出身高校偏差値分布の推移に関して

図1及び表2、3の結果から、推薦入試、一般入試のそれぞれにおいて、受験者の高校偏差値分布の位置はあまり変化していないことが明らかとなった。よって、少なくとも検討した期間において、いわゆる上位校離れは起きていないと考えられる。

しかし、推薦入試合格者の分布は、2007～2009年度は上ヒンジが50以上であるものの、2010～2012年度は上ヒンジが50未満となっていた。

これについては、志願倍率が影響している

と考えるのが妥当である。表1に示すように、推薦入試の受験者数は2012年度まで単調減少であった。一方で定員は15名と同じであったから、倍率は年々低下していた。それゆえ、相対的により大きい割合で受験者を合格させた2010～2012年度のほうが、合格者の高校偏差値分布が低いところに位置するようになったのである。2013年度入試では倍率が高くなった結果、合格者の分布が高くなっている。それでも、推薦入試合格者の分布は、一般入試受験者の分布より低い位置にある。もともと推薦入試受験者の分布が一般入試受験者の分布より低い位置にあるからである。

高校偏差値が相対的に下位の学校からの入学者数が大きくなれば、入学者に占めるそれらの学生の割合は大きくなり、入学者全体の学力水準が低下していると捉えられている可能性がある。

5.2 推薦入試とセンター試験の関連について

図1及び表2、3の結果から、推薦入試受験者の高校偏差値の分布は、一般入試受験者の分布より5ポイント程度低い位置にあり、推薦入試は、相対的に下位の学校を対象とした入試区分になっていることが確認された。

この要因の1つとして、同学部の推薦入試では、大学入試センター試験を課していないことが考えられる。

実際、同学部の推薦入試不合格者が同学部の一般入試を受験する割合は、センター試験を課す推薦入試を実施している他の学部の人に比べ小さく、また、センター試験を課す推薦入試を実施している学部において、推薦入試受験者の高校偏差値分布は、一般入試受験者の分布よりやや低い程度であり、同学部のような隔たりは見られない。さらに、推薦入試においてセンター試験を課すように切り替えた学部において、推薦入試受験者の高校偏差値分布が上昇するとともに、推薦入試不合格者が同じ学部の一般入試を受験する割合

が大きくなっていることも確認されている。

これらのことから、同学部の推薦入試不合格者の多くは、一般入試では同学部を志望せず、より合格可能性の高い大学・学部などに志願先を変更している可能性が示唆される。

5.3 センター試験成績分布の推移について

図 2 及び表 5, 6 の結果から、一般入試受験者及び合格者のセンター試験成績の分布は、年度間であまり上下しておらず、分布の中心的位置はほとんど変化していないことが分かった。しかし、同じ図表において、成績の高いところの値が減少していることも確認された。このことから、一般入試において上位者離れが起きている可能性が示唆される。科目別で検討すると、英語はほとんど変化はないが、国語及び数Ⅱ・数Ⅲにおいて高成績者が減少していることが確認される。

5.4 全体的考察

以上から、少なくとも 2010～2012 年度における同学部の一般入試受験者において、いわゆる上位校離れは起きていないが、上位者離れは起きている可能性があると考えられる。

上位者離れに見える現象が、「推薦入試を実施すると学部のレベルが下がる」現象なのか、上位大学との入試科目の違いから敬遠されるようになったのか、それとも、各年度の受験者数が 150 名程度であることによる経年変動の範囲内のことなのか、本研究の結果から断定することはできない。

しかし、推薦入試の影響として言えることは、推薦入試、特にセンター試験を課さない推薦入試自体が、相対的に学力水準が低い層の受験者のための入試になっており、その層からの受験者をより大きい割合で合格させているということである。それが入学者の学力水準の低下として捉えられている可能性はあるであろう。

6 まとめと今後の課題

本研究では、受験者の学力レベルがどのように推移しているか、推薦入試との関連も含め検討した。その結果、2010～2012 年度の 3 年間の間において、(1)上位校離れは起きていないこと、(2)しかし、上位者離れは起きている可能性があること、(3)推薦入試、特にセンター試験を課さない推薦入試自体が、相対的に学力水準が低い層の受験者のための入試になっており、その層からの受験者をより大きい割合で合格させていること、(4)そのことが入学者の学力水準の低下として捉えられている可能性があること、などが示唆された。

本研究では、一般入試について、3 年という短い期間の検討であるため、より長期的な影響や、推薦入試導入以前との比較ができていない。より長いスパンでの検討が必要である。

また、本研究では、高校偏差値及びセンター試験受験者全体の学力水準は検討した期間で一定という仮定を置いている。もし、センター試験受験者全体の学力レベルが変化していたら、本分析で用いた手法では不十分であり、係留テスト法などを用いた調査研究を行う必要がある。

本研究では、学力レベルに関する懸念について検討するため、高校偏差値及びセンター試験成績を分析指標に用いたが、推薦入試の特長を捉えるためには、他の指標を用いて検討することも必要であると考えられる。また、入学後及び卒業後の追跡調査を行うことも必要であると考えられる。

参考文献

石井秀宗 (2012). 「推薦入試の経年分析—志願者の動向及び学業成績の検討—」『大学入試研究ジャーナル』, 22, 35-42.